埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

<研究ノート>
『和漢朗詠集』情報開示に関する課題と私案

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): wakan roei shu, fujiwarano kinto, manuscripts, each copy 作成者: 山本, まり子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1278

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

『和漢朗詠集』情報開示に関する課題と私案

山本　まり子

はじめに

『和漢朗詠集』の伝本が翻字されている書籍のうち、代表的なものとして以下の二つを挙げることが出来る。『伝藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釈文』[*1]、『新編国歌大観』[*2]である。今日の多くの研究者が基礎資料として引用するそれら二つの書籍は規範的存在である。しかし、それぞれ次の点において課題を抱えていると言わざるを得ない。

前者（以下、堀部校本と略称）は『和漢朗詠集』諸伝本の集成がなされた唯一の書籍である。不朽の著作であるが、山城切等の解題、釈文のために執筆されたものであることから校本としては再検討を要する点がある。一方、後者（以下、『国歌大観』と略称）の底本には粘葉本が採用されている。『和漢朗詠集』が引用される際、その番号が用いられることが多い。しかし、番号、及び翻字内容について、再検討の必要性を感じる。

撰者とされる藤原公任（九六六―一〇一四）は学才豊かな文化人であり、この公任の撰による『和漢朗詠集』が当時を代表する作品の一つであることに疑いの余地はなく、これを研究することは我が国の文化を理解する上でも極めて重要である。

周知の通り、公任の撰した原本は現存しない。収集・集成した伝本を選定の上、資料提供を行うことは古典の基礎研究に必須であるところ、『和漢朗詠集』については金字塔的作品でありながら研究の基盤を成す本文の整備が未だ十分に行われていない。翻字内容の精密さが問われるのは当然のことであるが、それと同時にそれらの資料を研究上、活用し易い形にした上で、広く開示することが重要な課題として残されている。その実情に鑑み、投稿者は現在、平安時代の書写とされる諸伝本について、その開示方法の確立を目指している。

一方、ＩＴの進化により研究手法が多様化している今、本課題について、情報開示のみにとどめるべきではないと考える。それは集めた情報をどのように整理・分類すれば当該データを有効活用し得るのか、それについて検討を行うことを意味する。よって本課題はデータベース（以下、ＤＢと略称）の構築と言える。

以上述べたことを実現するためには各伝本の実態調査を行い、

そのバリエーションをある程度、把握した上で各伝本の関連性を見出し、その系統立てを試みることが求められる。以上の構想の下、投稿者は『平安時代書写 和漢朗詠集 諸伝本の研究』[*3]（以下、拙著と略称）を上梓した。

本稿では先学による情報開示内容・方法について概説し、投稿者が目指すＤＢの内容に関する私案について論じる。

『国歌大観』記載の番号は当該ＤＢに不可欠である。しかし、前述した通り、その番号、及び翻字内容について該書には再検討すべき箇所が存する。本稿ではその点についても付言する。本稿における『和漢朗詠集』の詩歌番号は『国歌大観』に拠る。

一　先学の研究成果における情報の開示内容・方法等

堀部校本では山城切が底本として用いられており、諸伝本の情報については山城切と校合されたその結果が略号によって示されている。従って、山城切を除くその他の諸伝本については、①詩歌句の配列が示されていない、②その記載順序に規則性が認められない点がある、③判読不可能、または困難な文字について網羅的に言及されていない、④切（断簡）・零本等について、当該詩歌句が堀部氏未調査の箇所であるのか、または当該伝本に存しない詩歌句であるのか判断がつかない等のことが挙げられる。

凡例に拠ると、該書は山城切の「釋文たらんことを主なる目的とした」ものである。よって、前記①・②・③・④を示す意図は固より編者にはなかったものと推される。しかし、それらが明確化されている方が資料提供の在り方としては望ましい。

堀部校本のごとく、底本を一本立てて、それと諸伝本との異同箇所を示す書式は他作品の校本においても行われていることである。例えば、『拾遺和歌集の研究〔伝本・校本篇〕』[*4]のごとく、底本を複数立てる校本もあるが、それらも基本的には堀部校本と同じ形態と言える。

本文集成の代表的なものとしては『古筆学大成』第二七巻[*5]等が挙げられる。掲出されている全ての伝本の詩歌句等の配列はそこから判る。しかし、校本のごとく諸伝本間に見られる異同箇所が示されていないため、その判別は使い手（読者）に委ねられることになる。各種校本の中には、取り上げられた伝本の配列がその巻末に示されていることがある。しかしながら、伝本数が多い場合、紙幅の都合上、掲出が可能なものは限られる。出来得れば全ての伝本の配列が示されている方が望ましい。また、それが本文異同とともに一覧されている方が活用し易いことは確かである。

なお、堀部校本では、512「帆開青草湖中去 衣濕黄梅雨裏行」、741「黄壤誰知我 白頭獨憶君 唯以老年涙 一灑故人文」の傍線部について、粘葉本の当該文字をそれぞれ「濕」・「獨」とするが、そこは「温」・「猶」と翻字されるべきであろう。粘葉本と近い関係にある伊予切はそこでは取り上げられていないが、『日本名跡叢刊』に拠ると伊予切[*6]も粘葉本と同様、「温」・「猶」である。粘葉本・伊予切から当該文字（図版）[*7]を挙げると以下の通りである。

512　【粘葉本】　【伊予切】

741　【粘葉本】　【伊予切】

既に拙著[*8]中、一部、事例を挙げて指摘した通り、他にも堀部校本の翻字内容について再検討すべき箇所が存する。全編に亘って

今後、見直しがなされるべきである。

二　『和漢朗詠集』諸伝本の情報開示に関する私案

【表1】は、平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本のうち、情報開示がなされるべきと判断される伝本の一覧である。[*9]

『和漢朗詠集』の伝本の数は古今集に次いで多いとされており、なおかつ平安時代の名筆が揃っている。文学のみならず、書の学問領域において『和漢朗詠集』諸伝本の学術的価値は高い。

僅かな分量しか現存していない切（断簡）の中には当該ＤＢにおいて取り上げない方がよいと思われるものもある。しかし、十一世紀中葉の書写と推定されている雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切のいずれにも確認されない詩歌句は後人の加筆であると考えられる。[*10]その情報は平安時代書写本が有する詩歌句のバリエーションを示すため、当該ＤＢに加える必要がある。

既に拙著[*11]において述べた研究成果に基き、堀部校本とも相違し、また、本稿中、指摘したその他の校本（または本文集成）とも異なる新たな情報開示の方法・内容に関する私案について提言する。それはＤＢの構築と言えるが、そのためには『和漢朗詠集』の構成について整理し、そこに名称を付す必要がある。まずその点について述べる。

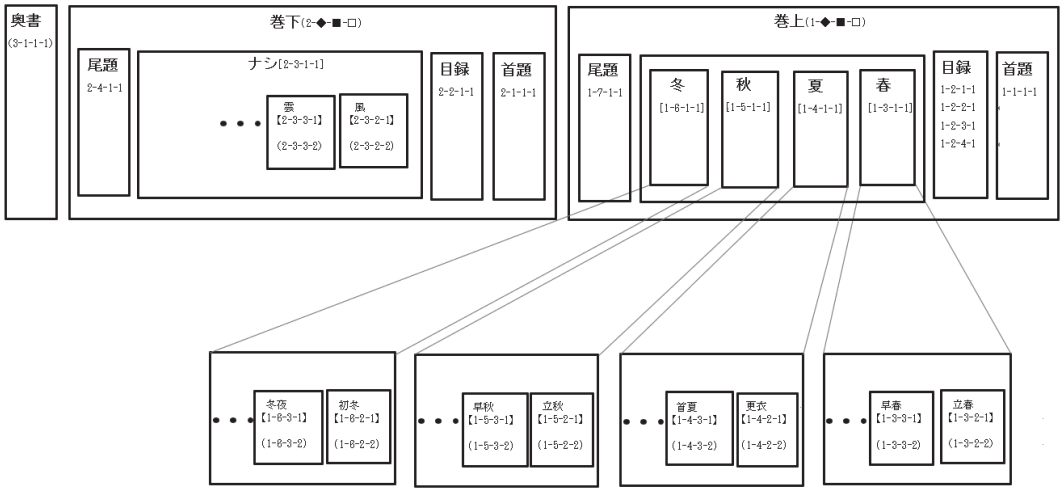
次掲【図1】の通り、『和漢朗詠集』は大きく三つのパートから構成されている。巻上と巻下、そして奥書である（奥書については存しない伝本もある）。巻上、巻下の中身については、完本等の場合、首題・尾題を有する伝本が多く、また首題の次に目録を有する伝本もある。以上の分類はＤＢの構築上、有効である。

【表1】平安時代書写『和漢朗詠集』諸伝本一覧

伝本名	筆者名	略称(1)	略称(2)
大宇和漢朗詠集切	伝藤原行成	伝行成筆大字切	行大
雲紙本和漢朗詠集	伝藤原行成	雲紙本	雲紙
関戸本和漢朗詠集切	伝藤原行成	関戸本	関戸
雲紙本和漢朗詠集切	伝藤原行成		雲切
粘葉本和漢朗詠集	伝藤原行成	粘葉本	粘葉
近衛本和漢朗詠集	伝藤原行成	近衛本	近衛
法輪寺切本和漢朗詠集	伝藤原行成	法輪寺本	法輪
伊予切本和漢朗詠集	伝藤原行成	伊予切	伊予
久松切本和漢朗詠集	伝藤原行成	久松切	久松
安宅切本和漢朗詠集	伝藤原行成	安宅切	安宅
唐紙本和漢朗詠集切	伝藤原公任	唐紙切	唐2
巻子本和漢朗詠集	伝藤原公任	巻子本	巻子
太田切本和漢朗詠集	伝藤原公任		太田
益田本和漢朗詠集切	伝藤原公任		益田
大内切本和漢朗詠集	伝藤原公任		大内
下絵和漢朗詠集切	伝藤原公任		下絵
山城切本和漢朗詠集	伝藤原定頼	山城切	山城
多賀切本和漢朗詠集	藤原基俊		多賀
大宇和漢朗詠集切	藤原定信	定信筆大字切	定大
戊辰切本和漢朗詠集切（巻下）	藤原定信	戊辰切	戊辰
戊辰切本和漢朗詠集切（巻上）	藤原伊行	戊辰切	戊辰
葦手下絵和漢朗詠集	藤原伊行	葦手本	葦手

なお、【図1】記載の数字（「アドレス」）については後述する。

以下、新たな情報開示の内容に関する私案について述べる。紙幅の都合上、『和漢朗詠集』所収の冒頭の作品のみを取り上げると【図2】の通りである。それによって、伝本間に見られる語句・配列の異同が一覧される。当該ＤＢの入力が完了すれば検索機能を兼ね備えたＤＢシステムの構築も可能となる。【図2】に挙げた私案は情報開示内容の一例でもあり、語句検索後の出力画面の



【図１】『和漢朗詠集』の構図・アドレス

巻上（春）　立春　〈1〉	粘葉	伊予	近衛	法輪	太田	戊辰	久松	行大	定大	安宅	巻子	唐2	葦手	山城	関戸	雲紙	大内	益田	下絵	多賀	雲切
逐吹潜開　不待芳菲之候　迎春乍変　将希雨露之恩 立春日内園／進花賦	1	1					1				1		1								
逐吹潜開　不待芳菲之候　迎春乍変　将希雨露之恩 立春日内宴／進花賦														1	1	1					
逐吹潜開　不待芳菲之候　迎春乍変　将希雨露之恩						1															
ナシ																					
未調査			○	○	○			○	○	○		○					○	○	○	○	○

【図２】平安時代書写『和漢朗詠集』諸伝本に関する情報開示・語句検索結果の例

一例でもある。

【図２】では詩歌句に加え、注記のことも考慮に入れ、一文字でも異なれば別物として扱う。そこでは三つのバリエーションがあることを示している。その右上に載せたのは伝本の一覧である。その配置は拙著[12]中、述べた諸伝本の関係を基に定めた。その中の左側の「粘葉」、つまり粘葉本に記されている詩歌句、及び注記を一段目に配置する。そして各バリエーションを載録している伝本に数字でフラグを立てる。そこから一段目のものが粘葉本を含む五つの伝本に記載されていることが判る。

フラグで使う数字、この場合の「1」は、各伝本において、当該作品が一番目に記載されていることを示すものである。ここでは冒頭の作品を例に挙げたため、すべてが「1」であるが、伝本によっては詩歌句の欠落があったり、配列上、入れ替わりがあったりする。その場合は同じ詩歌句であっても異なる数字のフラグが立つ。

この表の四段目の「ナシ」とは、当該詩歌句が無い（つまり書写されなかったものである）ことを意味する。その下の「未調査」とは投稿者が未調査であることを意味する。零本や切のため、本作品が見当たらない場合、この「未調査」の欄に○印が付されることになる。「未調査」の下の段には空欄を設け、判読不可能、もしくは判読困難な文字についての説明、画像等を載せることも可能である。

当該ＤＢでは、堀部校本に記載されていない情報（本稿の第一章中、指摘した①・②・③・④）を補い、なおかつ、各伝本の関係の概要を示し、また詩歌句・注記、及び首題・尾題・目録・題・奥書等、諸伝本が持つほぼ全ての情報を収め得る。

三　『新編国歌大観』記載内容の実態とアドレス

当該ＤＢ中、『国歌大観』番号は不可欠である。既述した通り、『国歌大観』の底本には粘葉本が採用されている。該書の凡例には「偶然的な脱落・衍字・誤写などが他本によって修正しうる場合は校訂を行った」という編集方針が示されているにもかかわらず、該書には「偶然的」とも見做し得ない詩歌句が加えられており、個々の本文・注記に校訂が施されている。まずその点について整理しておきたい。

該書には粘葉本には存しない二首（322・678）が追補されている。うち、678は前述した凡例に照らし、該書に収められるべきではないと考える。当該句は山田孝雄氏により、後人による追補とされており、[13] 平安時代書写本において当該句を有するのは投稿者の調査の範囲では久松切のみである。それも677と679の間（行間）に久松切の書写者の筆跡とは異なる筆で小字にて追補されているものである。[14]

一方、322については、久曽神氏の指摘[15]の通り、公任の原本には存在していた可能性はあるものの、322は伊予切にも存しないことから、粘葉本の書写者による「偶然的な脱落」ではなく、両本の親本において既に存しないものであったと見られる。[16] よって、322も該書中、加えられる必要はないものと思われる。むしろ諸伝本中、粘葉本にのみ存しない「よのなかはゆめかうつゝかうつゝともゆめともしらすありてなけれは」（796の次に位置する）の方が加えられるべきである。粘葉本と同類と考えられる近衛本・法輪寺切にも本歌が存することから本歌こそ粘葉本の書写者によるミステイク（「偶然的な脱落」）であった可能性が高い。

また、該書では、個々の本文・注記に数多くの校訂が施されているが、そこにおける校訂の基準も定かではない。以下、その点について述べる。

例えば、554「遺愛寺鐘欹枕聴　香鑪峯雪巻簾看」の傍線箇所「巻」について、粘葉本・伊予切・近衛本では「巻」であるが『国歌大観』では出典（『白氏文集』巻十六）の本文「撥」に校訂されている。そのような事例のごとく、『国歌大観』では、漢詩等については出典（以下、「他の文献」とも称す）と異なる場合、その本文に校訂されることが多い。しかし、中には出典と異なっていても校訂されていない事例が確認される（204「悴」・310「胡」・417「胡」等）。一方、出典の本文が粘葉本類と同文であるにもかかわらず校訂されている事例も見受けられる（618「宦」・706「珪」を『国歌大観』では618「官」・706「圭」に校訂する）。その他、粘葉本・

伊予切・近衛本では、741「猶」とある箇所について、『国歌大観』では「独」と翻字されている。しかし、出典では当該箇所は「徒」である。

一方、和歌の場合は異なる。202「あまのかはあふきのかせにくもはれてそらすみわたるかさゝきのはし」の傍線箇所について、粘葉本・伊予切・近衛本では「くもはれて」であり、『国歌大観』においても同文であるが、本歌中、当該箇所を「くもはれて」とする作品は他の文献中、見出し得ない。その他、79「はやたちにけり」・111「なりにけるかな」・142「いまやちるらん」・166「かよふなれ」・190「くさふかく」・293「あさきりの」等の粘葉本類の本文も出典と異なるが、『国歌大観』では校訂されていない。ここから校訂者の関心が和歌よりも漢詩等の方に向けられていたことが知られる。

既に拙著[17]中、指摘した通り、粘葉本と伊予切は別人の手による可能性が高いと考える。その両本の本文が同文であり、なおかつ他本との間に異同がある場合は、書写者による「偶然的な脱落・衍字・誤写など」ではなく、両本の親本にそのようであった可能性が高いものと考えられる。

なお、『国歌大観』の解説中の粘葉本の詩歌句数「八〇四首」は八〇二首に訂正されるべきである。

『国歌大観』記載の番号をDB上、載せる際、以上述べた点を留意する必要があるが、平安時代書写本の中には、前述した一首（796の次）の他にも『国歌大観』に所収されていない詩歌句がいくつか存する。紙幅の都合上、『国歌大観』所収の番号を用いてそれらの位置を示すと以下の通りである。

92の次・323の次・344の次・376の次・422の次・434の次・652の次・735の次・736の次・803の次

当該詩歌句の位置については右記の表記により判るものの、DB構築のためには当該情報の特定を行うべく、新たな番号を付与する必要がある。『国歌大観』記載の番号と区別するため、それらを便宜上、アドレスと呼称する。その私案の一部を前掲【図1】に示した。

『和漢朗詠集』の構成は、前掲【図1】に示した通り、巻上と巻下、奥書から成る。アドレスの冒頭の数字については、巻上を「1」とし、巻下を「2」とし、奥書を「3」とする。いずれのパートに属するのか、その数字によって判別される。数字の後にはハイフンを用いて一つのアドレスに四つの数字を使用するが、その数字によって当該箇所の所在が示されることになる。以下、そのアドレス（私案）のいくつかを挙げてその説明を行う。

巻上の巻頭の首題「倭漢朗詠集巻上」を1-1-1-1とする。その次に位置する「目録」の「春」部は1-2-1-1、「夏」部は1-2-2-1、「秋」部は1-2-3-1、「冬」部は1-2-4-1である。

次に記されている四季名「春」は1-3-1-1。その次に存する題「立春」は1-3-2-1。以下続く詩歌句等のうち、冒頭の句は1-3-2-2であり、その次の句は1-3-2-3である。

「立春」の次の題「早春」は1-3-3-1。その冒頭の句は1-3-3-2であり、その次に位置する句は1-3-3-3である。

一方、巻下の冒頭の題「風」は2-3-2-1であり、それに続く冒頭の句は2-3-2-2である。その要領で行うことにより、前述した『国歌大観』未所収の十一首にもアドレスを付与し得る。なお、【図1】

の各題のアドレスの後に示したものは、そのパート内の冒頭に配されている句のアドレス（紙面の都合上、一首のみを掲げる）である。

今後、仮に鎌倉時代以降書写本の情報を追加する（データの更新を行う）場合、『国歌大観』未所収の詩歌句は更に増えることになるが、本アドレスは構成要素ごとに付しているため、当該句以降の全ての番号（アドレス）を変更せずともその範囲内での修正によってアドレスの付与は完了する。当該ＤＢの構築はデータを管理する上でも扱い易いという利点がある。

おわりに

従来、粘葉本は最善本であるとされてきた。その理由には、書写年代が古く、能書の手による作品であり、また、平安時代書写の諸伝本中、詩歌句数が多いことが挙げられる。単に多いというだけではなく、雲紙本類と比較した場合、粘葉本類（粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切）の親本の姿は322を除くと雲紙本類の詩歌句の全てを有していると推測される。そのことも最善本と言われる所以であろう。

仮に校本の作成を行う場合、堀部校本のごとく、底本となる一本を立てて、それと他本との校異を示す書式を選択するならば、底本とすべき伝本は粘葉本の他には見当たらない。しかしながら、既に拙著[18]において指摘した通り、粘葉本類には少なからず誤字・脱字があり、また、粘葉本類の本文・配列は諸伝本中、特異である。よって、その書式ではかえって煩瑣を極める結果となる。また、平安時代のみならず鎌倉時代以降も粘葉本類は普及しなかった。仮に、今後、当該ＤＢに鎌倉時代以降書写本の情報を追加・更新する場合、そこでまた同様な問題を抱えることになる。その観点からも前述した私案は理に適っていると考える。校本は単なる情報の羅列ではない。作成者の表現であり、主張でもある。

本稿中、既述した通り、当該ＤＢにおいて、情報開示にとどまらず、その後のデータの有効活用に関することも検討したい。例えば詩歌句の中には、『和漢朗詠集』諸伝本間において殆ど異同のないものと、多くの異同が存するものとが混在している。その誘因について究明を試みることは今後の課題である。当該ＤＢが完成すればそこから事例を抽出したり、また、異同の多い順に並べ替えを行ったりすることが可能である。またそこから語句検索システム構築への道も開ける。当該ＤＢに収められている情報を対象とする全文検索がかけられ、それが実現すれば従来、各種校本に付載されていた「初句索引」等は不要となる。

なお、『国歌大観』ＣＤ―ＲＯＭ版には検索システム機能が付いている。「語彙・句・歌集歌番号」を検索するためのものである。しかしそこで採用されている『和漢朗詠集』の伝本は粘葉本のみである。本稿中、既に指摘した通り、そこでは校訂が施されており、粘葉本の真の姿を知り得ないという問題がある。また粘葉本を除く伝本の情報は収められていない。アンソロジーである『和漢朗詠集』に所収されている作品は他の文献と重なるものが多いが、他文献の中には散逸した作品もあり、注記がその出典に関する情報を有する場合もある。そのように『和漢朗詠集』諸伝本の注記の内容には資料的価値を有するものが存するが、粘葉本の注記が詳細であるとは言えない。

『和漢朗詠集』が他の作品に多大な影響を与えたという事実は周知の通りである。当該DBにおいては、『和漢朗詠集』所収の作品に関連する他の文献の情報（テキストデータ・画像等）の追加も可能である。それにより『和漢朗詠集』にとどまらず、他作品の研究への寄与も期待される。

（注）

*1　伊藤壽一・鹿嶋（堀部）正二編『伝藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釈文』［里見忠三郎、一九三九年］

*2　『新編国歌大観CD−ROM版Ver.2』［角川書店、二〇〇三年］

*3　山本まり子著『平安時代書写 和漢朗詠集 諸伝本の研究』［お茶の水女子大学E-bookサービス、二〇一七年］

*4　片桐洋一著『拾遺和歌集の研究〔伝本・校本篇〕』［大学堂書店、一九八〇年］

*5　小松茂美著『古筆学大成』第二七巻［講談社、一九九一年］

*6　いわゆる「第三種」にあたる箇所である。

*7　粘葉本は『日本名筆選9』［二玄社、二〇一二年］、伊予切は小松茂美監修・名児耶明解説『日本名跡叢刊55』［二玄社、一九八一年］から引用。

*8　前掲（注3）に同。第一章 第三節

*9　掲載順、引用の出典等（略称は除く）は『古筆学大成』第一三・一四・一五巻［講談社、一九九〇年］に拠る。

*10　山田孝雄校訂『倭漢朗詠集』［岩波書店、一九三九年］一三〜一五頁

*11　前掲（注3）に同。

*12　前掲（注3）に同。

*13　前掲（注10）に同。一四・一五頁

*14　小松茂美著『古筆学大成』第一三巻［講談社、一九九〇年］四二八頁

*15　久曽神昇著『仮名古筆の内容的研究』［ひたく書房、一九八〇年］一九七頁

*16　前掲（注3）に同。一四九頁

*17　前掲（注3）に同。一〇一頁

*18　前掲（注3）に同。一六二・一六三頁

［謝辞］

本稿中、漢籍の出典についてご教示頂きました片倉健博氏（日本大学）に御礼申し上げます。

本稿中、引用した図版は『日本名筆選9』［二玄社、二〇一二年］、小松茂美監修・名児耶明解説『日本名跡叢刊55』［二玄社、一九八一年］に拠る。掲載をお許し下さいました同社に御礼申し上げます。

［付記］

本研究はJSPS学術研究助成基金助成金JP15K02214の援助を受けたものである（「『和漢朗詠集』諸本の集成と研究」・基盤研究〈C〉）。

My Personal Suggestions and Issues regarding the Sharing of Information on “Wakan Roei Shu”

YAMAMOTO, Mariko

キーワード：和漢朗詠集、藤原公任、写本、伝本
Key words ：wakan roei shu, fujiwarano kinto, manuscripts, each copy